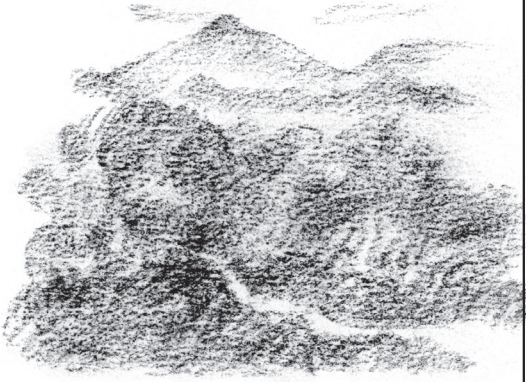


# 扇や通信 '09春・夏号

あだたら高原に、また春がめぐり、夏がやってきます。森がいちばんいきいきと美しい季節…。今回は、森のものがたりをお届けいたします。

扇や女将 鈴木 亜矢



それは、満月の夜と朝の境に森の中で起きています。大きなブナの木の下で、そこで精霊たちの踊りの会が開かれます。精霊は、嫁入り前に死んでしまった若い娘たちで、青くすきとおる衣を着て、白い野バラの花の冠を付けています。夜露をあびてキラキラ光りながら、たくさんの精霊たちが輪になつたり離れたたり、また輪になつたり

風に舞う花びらのようにかろやかに舞いつづけます。コウモリたちを従えて、木の枝にしつらえた玉座にすわって踊りを見守っているのは、精霊たちの女王です。虹の中をいつも自由に往き来している女王は、薄い衣も長い髪もみんな虹色に輝いています。

その夜は、その日新しく精霊の仲間に加えられたばかりのユウリの歓迎の踊りが行われていたのです。

精霊たちは人間だった時の年齢で十九歳になると、森のきまりで花になります。ある者は山ゆりに、ある者はカタクリに、桔梗に、鈴らんに、こぶ

## 森のものがたり

しの花に、山桜に、そして人間の世界に深い思いを残してきた者は、青い小さな忘れな草になるといいます。

精霊たちが花になって何年かが過ぎると、みんな天に帰って子供になりまします。精霊にならなかつた者たちは、先に天に帰って子供になっていますから、そこでなつかしい家族や友達に会うこともあるそうです。

天の国では、子供たちが、「今度はどここの家に、どんな人の子供になつて生まれようか」と、王様といっしょに考えるのだそうです。どこの子になるか決めるまで、子供たちは、風や鳥雨や雪、ときには雷になって、いろいろな人に会いに行くのだそうです。

## ユウリのおはなし

ユウリは十六歳。あだち野の村の美しい娘でした。生まれつき体が弱く、両親も周りの人も、ユウリが七歳まで無事に育つかどうか心配していました。が、なんと大きくなつたばかりか、花のように白い肌とほっそりした体、夜の森のように黒い髪の、それは美しい娘になりました。しかも、たいそうな踊り上手で、村の祭りになると、ユウリの踊る姿を一目見ようと、遠いよその村からまで人々が集まってくるほどでした。ユウリの踊りといった



ら、いつたいてどこで誰に習つたのかと思われるほど雅びでかるやかで、「まるで天女の踊りのようだ」と人々はため息をついて見とれたものです。そんなユウリが、恋をしました。踊りの輪の中に、ひととき目立って美しい若者がおりました。若者はひと目でユウリを愛し、ユウリもその若者に心を奪われてしまったのです。その若者は、毎日のようにユウリに

会いにやって来ました。どこの誰かはわかりませんが、見えつ隠れつ従者のような男が付いてくるので、「どこかの高貴な身分の人にちがいない」と村人は噂しておりました。ユウリの両親も、身分がいの恋を心配しましたが、二人はしんそこ愛し合つているようでした。ある時、若者はユウリに、美しい青い玉の首飾りを渡して、「いつまでも一緒にいてほしい」とささやきました。ユウリは天にも昇る心地です。青い玉の首飾りを肌身離さず付けて、夜は胸に抱いて眠りました。

ある日のことです。国司の一行があだち野の村々の見回りに来るついでに、奥方とその娘たちが花を摘んで野あそびをする接待をせよ、と村々に命令が下りました。村人はてんやわんやで道ばたの草を刈つたり、目ざわりな枯木を片づけたり…そして国司の一行が来る日は、村の娘や若者たちの歓迎の踊りの宴を催すことになりました。

その日、やってきました。国司の見回りも無事に終り、奥方たちも野あそびに満足して、一行は上機嫌で宴の席に座りました。満月が森の端から上りはじめ、笛や太鼓が鳴りひびいて、踊り手たちが登場しました。月の光を浴びて、美しいユウリの踊りは群を抜いて一行の目に留まりました。

踊りが終ると、国司と奥方は「あのすばらしい娘に褒美をつかわそう」とユウリを呼びよせました。膝まついたユウリの胸元を一目見た国司の娘が、